

一仏両祖の教えを今に伝える

平成11年12月24日第三種郵便物認可(毎年1.3.6.9月の1日発行)平成30年9月1日発行 第146号

曹洞禅 グラフ

SŌTŌZEN GRAPHICS

2018 秋号 No.146



佐々木宏幹・わが人生を語る(上)
虚弱な戦争っ子がここまで生きてのは
御仏としての祖父母と両親のおかげ

[聞き手] 藤木隆宣

寛容さを失う 社会のゆくえ

増山 均

早稲田大学名誉教授

ましまま・ひとし
教育学・社会福祉学者
1948年栃木県生まれ。
日本福祉大学社会福祉学部教授、
早稲田大学文学部芸術院教授を経て、
早稲田大学名誉教授。
『アニメーションと日本の子育て・教育文化』
『子育て支援のフィロソフィア』
など多数の著書がある。

子どもの声は 「騒音」なのか

近年、大人と社会の側の「子どもへのまなざし」がどんどん狭くなり、許容度・寛容さを失って来てはいないだろうか。

「公園で遊ぶ子どもの声がうるさい」という苦情や、保育所や小学校の近くに住む住民が子どもの声を騒音として訴える「騒音訴訟」が各地でおこっている。西東京市で起きた訴訟では、公園でスケートボードをして騒ぐ子どもたちへの苦情が発端である。東京都の騒音基準は50デシベルだったが、子どもたちの声を測定した結果60デシベルだったため、スケートボードが禁止された。

静かな生活を求める高齢者や、静養を必要とする病弱者の気持ちも分からないわけではないが、そもそも「子ども（たち）」は騒々しい生き物である。かつて幼い日の自分たちもそうだったように、社会性の未発達な子どもたちは、羽目（はめ）をはずし周囲に

学校教育の現場などでは、教師の言うことを聞かない「問題児」に対して、アメリカの学校に学び、ゼロトランス（寛容度ゼロ）という考え方も検討されている。「事件」を起こした

少年少女に対して、ますます厳罰化（げんばつか）の傾向が強まる少年法の改正など、全体として、失敗や逸脱（いっだつ）をしながら育つ子どもたちへの理解度・許容度が薄くなっているように感じる。

絶滅危惧種としての 「子ども社会」

日本社会の寛容度の喪失（そうしつ）と過剰警戒（かじょうけいがい）、先回り対策拡大の現実、子どもたち自身の生活と仲間づくりによる「子ども社会」の形成を狭めているのではないか。子どもたちへの管理的・監視的まなざしは、子どもの健康な育ちにとって不可欠な「子どもの自由世界」（①自主的な時間の活用、②主体的に選択できる活動、③自治的な活動の運営）を縮小・喪失させ、活力ある「子ども社会」を失わせてしまふ。

子どもの発達途上に現れる仲間との掟（おきて）を重視しおとな社会に対抗・反抗するギャング・エイジ期が失われていく。それは「子ども期」の剥奪（はくだつ）・喪失につながる。そのことが、子どものその後の発達・人格形成にどのような影響を及ぼすかを、改めて見つめ直し考え直すべき時代ではないだろうか。

迷惑をかけ、叱られながら育ってゆくものである。どんなに便利で快適な生活が準備されても、赤ん坊の泣き声ひとつ聞くことが出来ず、子どもたちの騒ぎ声が響かず、子どもとの関わりのない地域の風景は「貧しく・寂しい」のではないか。

「安全」「健全」への まなざしの強まり

許容度の狭まりと反比例して強まり拡大しているまなざしは「安全と健全」育成へのまなざしである。

「安心・安全」が強調される陰で、子どもの行動や子どもの仲間関係への監視と管理がすすんでいる。さまざまな場所にひろがる監視カメラの設置、GPS（全地球測位システム）による行動管理によって、いつでも大人や親が子どもを監視できる状況が作られている。子どもが通常の通学路から離れるとアラーム機能が反応するようなランドセルさえ開発されている。子どもの「けんか」や「いたずら」・「わるさ」はもとより、「みちくさ」や「よりみち」も許さない、善意の「見守り」「先回り」による健全育成システムが広がっている。



挿絵 / 長谷川葉月

虚弱な戦争っ子がここまで生きたのは 御仏としての 祖父母と 両親のおかげ



聞き手 藤木隆宣

こんなに長生きするとは
思いませんでした

藤木 先生はこの五月で米寿（八十八歳）をお迎

（二〇一八年夏号）でございます、季刊ですので
四で割って三十六年続いていることになりました。

佐々木 そんなになりますか。

藤木 はい。おかげさまで。

佐々木 お互いに年を取ったわけですね。刊行
は本場に立派なものだと思えますよ。これだけ
続いているということは。

藤木 ありがとうございます。今日は先生に、
これまで歩んでこられましたことを中心に、い
ろいろとお聞きしていきたいなと思っておりま
す。

佐々木 私はとても八十八なんて、そんなに長
生きできないと実は思っておったんですよ。昭
和一桁（ひとけた）生まれで、周りをみるとやっぱり私は長
生きしているほうだと思えます。私は戦争っ子
といておりますが、あと二年早く生まれてい
たら徴兵令（ちようへいれい）に引っかけたわけです。敗戦が一
九四五年（昭和二十年）で、そのとき十五歳、十
七になると陸海軍だとかいろいろ引つ張られた

えになられたということですね、まずはおめで
とうございます。

佐々木 ありがとうございます。

藤木 私どもの『曹洞禅グラフ』は一四五号
わけで、それを逃れることができた。それは、
先輩で亡くなられた人たちには悪いけれど、そ
んな感じがしています。

私が生まれたところは宮城県気仙沼（けせんぬま）という、
これは鱈（かっお）や鮪（まぐろ）の水揚げをする港として、静岡県
の焼津（やいづ）と並びます。

藤木 有名な漁港ですね。

佐々木 日本の三大漁港の一つです。私は気仙
沼（せぬま）のほぼ中心の少林寺（しょうりんじ）というあまり大きくない
寺で生まれました。育ったのは少し離れた宝
鏡寺（ほうきやうじ）においでです。気仙沼には広野さんとい
う檀家総代の方がおられた。それも二〇一一年
の大津波でやられてしまいました。私の小さ
いころ、広野さんが「坊、坊」といって非常に
可愛がってくれたことを覚えています。

藤木 そうでしたか。

佐々木 あの二〇一一年の大津波のときは、居
場所を失った人たちが少林寺（しょうりんじ）でみんなが憩（い）い、
寝泊まりしたという、そういうお寺です。私が



佐々木宏幹（ささき・こうかん）■1930年、宮城県生まれ。東京都立大学（現、首都大学東京）大学院修了。駒澤大学名誉教授。
『人間と宗教のあいだ』（南斗書房）、『チャーマニズム』（中公新書）、『聖と呪力の人類学』（講談社学術文庫）など著書多数。

当時のそうした軍国体制に 各宗門で反対するということはほとんどなかったんですね。

なぜそこで生まれたかというのと、先に述べた宝鏡寺という大きなお寺の娘の夫になったのが、多くの父親であり、宝鏡寺の娘のお婿さんとして、少林寺の住職をしていたからです。

二歳で父を、 三歳で母を亡くし祖父の寺へ

佐々木 どうも今考えると、私の父親は結婚する前に肺結核を患っていたのではないかと思えます。というのは二人の結婚式の写真を見ると、父親の頬がちよっとこけています。ところが駒澤大学時代の父の写真を見ると、年も違うけど真ん丸な顔をして、がっしりしていた。それが、お婿さんで気仙沼に来るころは、胸を患っておったのかと思うような顔つきです。父親はぼくが二歳のときに亡くなっていますので、父の顔は写真でしか分からないんですね。

父が葬られるときに、お墓で撮った写真が残っていて、そこに母親が写っていますが、この母も翌年亡くなる。肺結核です。やはり父親の病気が移ったものと思います。ということ、二歳のときに父親、三歳で母親が亡くなってしまった。

私は一人っ子ですが、物心がついてからは母方の祖父のところ、新月という村の宝鏡寺へ引き取られました。今の金仙山宝鏡寺は大きな、立派なお寺です。そのころは女中さんということで、お姉さんが二人おりましたが、遊び相手

佐々木 だから、戦争っ子というのは、一方では不運な子だから、不運っ子でもあった。これは藤木老師もご存じないと思いますが、そのころの全国の小学校には奉安殿というものがあって、そこに昭和天皇と皇后の写真が納められていたんです。入学式や卒業式、いろいろな式があるときには校長がそれを恭々しく持って来て、われわれは気をつけの姿勢です。不動の姿勢を一年生のときから取らされて、最敬礼ですよ。つまり、昭和天皇は神だということ、大正まではそうではなかったわけですが。

二・二六は 物心がついたころの大事件

佐々木 天皇の神格化というのは、文献によると、やはり陸軍が中心ですね。彼らはアジアを何とか征服して、日本を一等国に育てたいという野望を持っておったようです。その急進的な連中が総理大臣から何から、平和を説くような人を殺そうとした。

藤木 昭和十一年の二・二六事件ですね。

佐々木 そのときは私、記憶にありませんが、東京に雪が降っておった二月二十六日早朝、陸軍の部隊が三百何名やって来て、首相官邸を襲った。機銃でもって殺していったわけです。官邸にいた岡田総理は偶然も手伝わって何とか窮地を逃れたものの、高橋是清大蔵大臣、齋藤実内大臣は、ともに私邸で銃殺された。齋

になってくれて、またよく面倒をみてくれました。それに祖父のお弟子さんが三人おって、祖父は真龍といいましたので、みんな名前に龍をつけられましたね、そのうちの一人の歓龍さん、二十五、六でしたか、この人も非常に可愛がってくれたんです。ところが、彼も肺結核になって、それが頭へ上って精神に異常をきたすようになってしまった。歓龍さんのことは今でもよく覚えています。

昭和十二年（一九三七年）というとき私が七つ小的时候一年生のときに、当時は支那事変といいましたが、日中戦争が始まった。それが十五年戦争の走り、十六年に太平洋戦争が始まり、二十年に原爆を落とされて負けたわけですね。つまり、その時期は私の思春期です。少年期から思春期にかけてずっと戦争のなかにおったわけで、

さつき申しましたように

に、私は戦争っ子です、

というのはそういう意味です。

藤木 先生はよくおっしゃいますものね。



藤内大臣というのは海軍大将でしたけれども、それはもうハチの巣みたいになっておったという。これがちょうど私が物心つくあたりの大事件でした。

それからこれは、ご老師のところの何かに書いたことがありますけれども、大体私が大人の話に関心を持ち理解できるようになったころ、ちょうど十二月八日のことです。法要をやっておったときで、仙台の有名な説教師が来て講演していた。戦争が始まったと。それは「待っていたときが来たんだ」と、そういうようなことを言っておってね。

藤木 その説教師さんが。
佐々木 そうです。お坊さんは殺しちゃならんと、不殺生戒というのが戒の一番最初にくるんですよ、お釈迦さまの教えで。つまり命をできるだけ殺さないように生きようということがお坊さんたちの伝統だった。それなのに、不殺生戒を公然と破っていった。また当時のそうした軍国体制に各宗門で反対するというのはほとんどなかったんですね。ただ、真宗の本願寺派の誰かがそれに反対を唱えて警察に引っ括られていきます。

だからほとんどの者が、やっぱり檀信徒もその気になっておったし、お坊さんも本当は戦争というものは、仏教とは最も相離れた出来事だというようになことを知っていながら、大勢に妥協せざるを得なかったんだらうと思います。大勢

順心じゆんしんということだね。そうしないと、檀信徒からお坊さんが批判を受けたと思う。とにかくそれは後になって、平和な時代で平和な学問をやった私にして、今感じることです。当時、私も大人だったらそういうふうになったかなと思います。つまり、大勢順心というのが日本人の性格の一つだと思いますよ。

藤木 今でもあるんじゃないでしょうか。

佐々木 おっしゃるとおり、今もそれはあると思います。つまり、それを悪い言葉で、「長いものには巻かれる」という。それから、「寄らば大樹の陰」という諺ことわざもあります。身を寄せるならば大きな木の下の方が、安全であり、利益も多いということですね。大樹とは何かというと、国レベルでは政府であり、国家権力ということになってきます。

大学入学費用を稼ぐため 小学校の代用教員に

佐々木 とくに当時は軍国主義で、どの中学にも配属はいぞく将校しょうこうがおりました。将校といったら偉えいいんですよ。下から少尉、中尉、大尉、少佐、中佐、大佐と。大佐となると三千人ぐらいの兵士を持つ連隊長ですから。カーキ色の軍服けんぷくに肩章しやうなんていうのを付けて、一等兵、二等兵のときは赤い布地に星が一つとか二つ。それが偉くになると金色になるんです。それで、中将、大將になると金だらけ、肩をいからせて威張いばってお

りました。あんな空威張からいばりというのは、今だと何に当たりますか、代議士でもそうは威張いばらない。やはり時代ですね。

配属はいぞく将校しょうこうなんていうのは、とくに威張いばっておって、「君らは何々であるからして、何々するようにせい」と。そうすると、中学校の校長先生もそこで黙もくって聞いておられるわけですよ。もちろんその後「今の時局じきよくがこうであるから、われわれも国のために一生懸命やろう」というような話がある。そういう将校しょうこうの中に村山中尉という美男子がおって、どういうわけか分からないけれども、案外と私を可愛がってくれました。この方は太平洋戦争中、アラスカのほうに船団を組んで行くとき、北海道沖おほしほか樺太からふと沖でアメリカの潜水艦に撃沈げいせふされて亡くなった。それを私たちは後で聞いて、非常に悲しんだことがありますね。

中学三年のときに敗戦となりますが、私は親もなかったし、祖父母が途中で亡くなりまして、その大きいお寺にいとこ筋の人たちがやって来たわけです。今までは私が一人で女中さんや小僧さんがおって、お山の大将みたいだった。そこへ兄弟の多いところが入って来て、住職を叔父おじさんが継つぐようになってから、私はいとこ同士のなかで一番年上だから、ものすごく気を遣つかったんですね。十七、八で高等学校を終えてから、大学へ入るのにできるだけ自分の力でと思って、少しお金をためようと、ちやうど自分の



佐々木 いくらかのお金があったところで、叔父おじの勧めすすめもあって駒澤大学へ入ります。いとも駒澤大学だったしね。どこの学部へということには叔父は言わなかったけれども、叔父の長男がその大きい寺を、つまり宝鏡寺を継つぐと思っておったから、そうすると、やっぱり月給取りにならないといけない。仏教学部を出たのでは、お寺に入らない

と仕事がないと思っておね。それで、駒大の英米文学科に入ったわけです。少し成績が良かったせいか、大学を出るとすぐ附属高校の英語の先生になることができました。

そのときによかったことは、四誓寮しせいりょうという寮があったじゃないですか。

藤木 聞いています。エリートが入る寮でしたね。

佐々木 そうです。エリートで、その人たちが威張いばっておってね。

藤木 ああ、やはり。
佐々木 私はそっちに入れなから、竹友寮ちくゆうりょうに入寮した。

藤木 ええ、竹友寮。みんなが入ったところですか。

私が受け持ったのは二年生と三年生で、大体三十七、八名から四十名のクラスです。「佐々木先生、佐々木先生」といって、なついてね。今はみんな年になっていきますけれども、いろいろそれなりに活躍かつやくしているんですよ。何かそういうことを考えるとほろほろとします。

駒澤大学英米文学科 卒業後も寮生活

中将、大將になると金だらけ、
肩をいからせて威張いばっておりました。

財法二施
功德無量
檀波羅蜜
具足円満

作品集

ご家族のみなさまの応募をお待ちしております

お手本を参考に、作品を半紙（横向、お名前は左側）に書いてご応募ください。（無料）
ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。
住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。

送り先 〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
仏教企画 電話042-703-8641

締切 平成30年11月末

毎日書道

高橋秀榮

財法二施
功德無量
檀波羅蜜
具足円満

今回のお手本の文句は「施財傷」といい、仏教の信者さんが尊敬する僧侶に財物などを施すときに心をこめてお唱えする四句の偈です。



佐々木宏幹先生の著書『生活仏教の民俗誌』(サイン入り)を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画(P.11送り先)まで、お名前・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえハガキでご応募ください。

平成30年11月末必着

曹洞禅グラフ144春号プレゼント高橋秀榮先生、画家平川恒太氏の共著『仏涅槃図の絵解き』は次の方が当選されました。

- 岩手県/近藤良子様
- 山形県/折原由美子様
- 神奈川県/伊従保美様
- 新潟県/横山修一様
- 静岡県/杉本多佳子様
- 愛知県/小椋淳様
- 三重県/山本きょう子様
- 京都府/成田宗寛様
- 山口県/藤井蔦枝様
- 長崎県/鈴木博子様

読者からのご便り 大槻彰代様

平成25年頃でしたか、正木先生の対談の中にマンダラの塗絵のお話がありましたが、本屋になくて、とりよせてもらってしたことがあります。私の父は昭和20年6月に沖縄で戦死しました。36歳でした。私が小学校1年の時です。後姿しか思い出せないのです。遺骨もありません。姉妹で沖縄の京都の塔や平和の礎の父の名前の前では涙が止まりませんでした。私も子の親です。父も2人の子と、3人目は母のおなかについて、顔を見たかったと思うとたまりません。病んだ時は助けて、良くなればありがとう、やっぱり近くで居ると思ったり。主人も亡くなって10年、今1人、仏壇に向かってどうしよう。でも子供がいっしょに墓掃除に行こうと言ってくれます。曹洞禅グラフのおかげであります。ありがとうございました。

お便り募集

佐々木 そうです。ところが事情があって私は途中から四誓寮に入ることになった。その寮の二階に山田霊林という、後に永平寺の禅師さまになられたし、駒澤大学の総長もやった方がおられた。私はとにかく英文科を出ましてから、気仙沼には帰らず、附属高校の先生をしながら、寮に残って勉強したり、アルバイトをしたりしておったんですよ。アルバイトに夜警みたいなお仕事もしました。

藤木 いろんなことをされていきますね。

佐々木 そうしたら、山田先生の使い走りみたいなことをする人が必要だということで、私が行ってやってもらったの。そっちのほうが食事は付くし、条件がいいわけです。そうしたら、どういうわけか、山田先生が可愛がってくれましたね。それが、その後の私を決定することになり

ます。私は山田霊林禅師には大変な恩義を被っているんです。

そのころ、戦前、戦後にかけては食べ物もなくなりまして、「かで飯」といって、大根だとか菜っ葉であるとか、いろんなものをご飯の中に入れる。それで、お腹を下してしまうとか、胃を悪くしてしまう人が多かった。私は今でも胃弱ですけれども、それはあのとときのこともあるのかと、あるいは両親が若くして死んでいまして、父が三十七、母が二十六ですから、その遺伝かもしれない。そう考えると、これまで生きたというのは大変なことで、それはひとえに周りの人びとのお蔭であり、両親と祖父母が守ってくれているからだと思っています。だから毎朝、お線香とお水をあげて、両親の戒名を唱えては拝んでおるんですね。

次号へ続く

作法で導く心の調え方

「貪」とは

藤井隆英

タイトルにあります「三毒」とは、仏教の教えに沿った貪・瞋・痴という煩惱の三要素です。今回は三要素のひとつ「貪」の説明をいたします。

「貪」とは「貪り」とも読みます。これは、自らの欲求を際限なく拡大しようとする心の作用です。仏教の教えでは、欲は人間に本質的に備わっているものと考えています。ですので欲自体は貪りではありません。

お釈迦様が入滅前に行った最後の説法をまとめたお経である仏遺教経には、「貪り」に関するこのような記述があります（現代語訳）。「足ることを知っている者は地べたに寝るような生活であっても幸せを感じている。しかし足ることを

知らない者は天にある宮殿のような所に生活していても満足できない。足ることを知らない者はいくら裕福であっても心は貧しい。」

「足ることを知らない者」とは、貪る心に支配されている者です。「足ることを知る者」とは、本質的な安らかさを常に探り得ている者です。貪りとは、自我意識が高まり、他者と比較することで欲求を満足させようとする時に起ります。

それでは決して本物の「足る」状態は得られません。本物の「足る」状態とは、物や行為を思いやる丁寧さによって生まれます。今回はお茶を飲む行為を通して心の安らかさが得られる「足る」作法をお伝えいたします。

作法とは、自分と他者の双方に思いやりを持って行う実践です。「足る」作法を行うと、自我意識が減退し、本質的な安らかさが導かれていきます。まず湯飲みにお茶を入れ、上半身を揺らして緩めてから背筋を伸ばし座ります（イスでも結構です）。顔は正面を向き、視線を斜め下（45度程度）に置き、そこに湯飲みが見えるようにします。そしてお茶が入った湯飲みを丁寧に眺めます。

1



眺める

2



受け取る

両手指先全体で、お茶の入った湯飲みを優しく包みこむように持ち、口元まで近づけます。湯飲みの重さや触れている感覚、お茶から湯飲みを通じて伝わる温度を指先で深く感じます。次にお茶の匂いや蒸気を鼻で感じます。大切なのは、「自分」で感じようとするのではなく、作法の流れの中で起こる事象を、自分の五感を総動員して素直に受け取ってあげることです。

3



思いやる

お茶をゆっくり飲んでいきます。湯飲みが唇に当たる感触、お茶を口に含んだ味や温度、飲み込んだのどごし、食道を通り胃に入りゆく感覚など、お茶が流れゆく先で出会う私の五感と丁寧に向き合い、全身でお茶を思いやり味わって下さい。お茶は飲むことで私の一部となります。お茶を思いやり飲むことは私を思いやることでもあります。それが心の安らかさに繋がっていくのです。

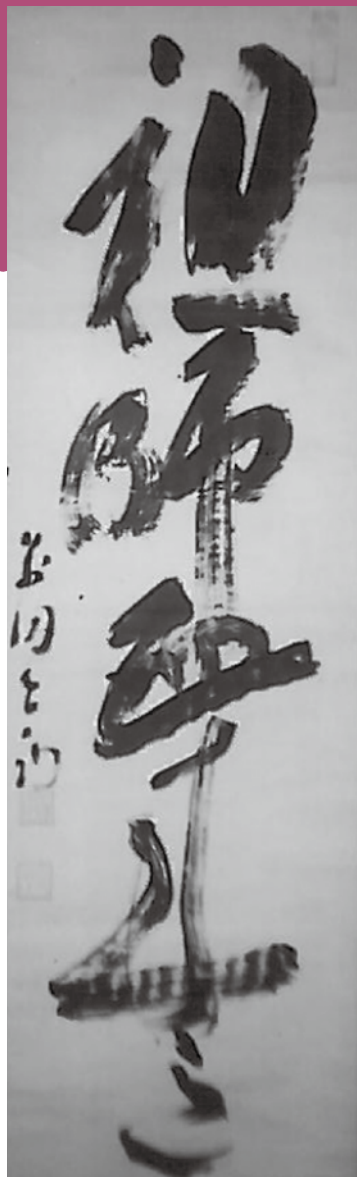
宗門人の書

吉岡博道

祖師西来意

祖師、西来の意とよみます。達磨大師がインドから中国に渡来した意義、目的は何ですかと質問です。更に仏法の奥義、禅の真髓を聞いています。昔より、禅問答に使われています。「いかなるか祖師西来の意」。この問いに対する答えは時、所においてさまざまですが、根本は、仏法は私達の日常、あし元にあるということです。この「祖師西来意」は宗門人がよく書いています。

二本掲げます。初めのは万仞道坦（一六九八―一七七五）です。大乘寺大機行休の弟子。主な住職地は愛知県長岡寺、万福寺、群



万仞の書(正泉寺蔵)

よしおか・はくどう

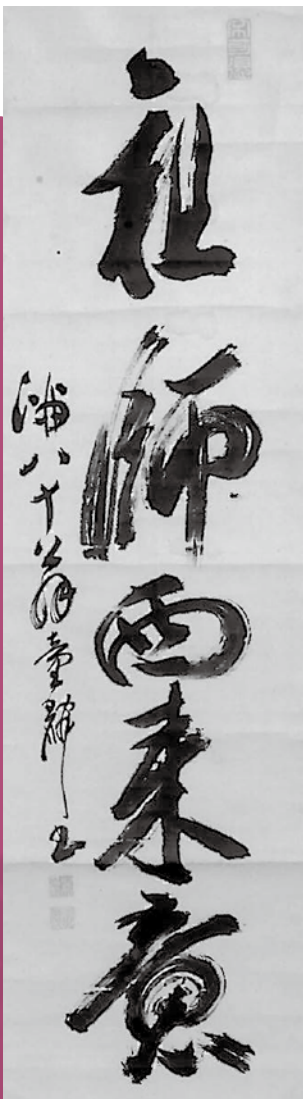
1942年9月27日、静岡県生まれ。駒澤大学仏教学部卒、永平寺僧堂研究科修了。現在静岡県藤枝市文化財保護審議会会長、曹洞宗禅文化の会会長、藤枝市正泉寺東堂。

馬県宝積寺、佐賀県泰智寺です。万仞は正法眼蔵について力を注ぎ、多くの著書があり、卍山・面山と並んで曹洞宗振興の祖と仰がれています。掲げた書は肉太に堂々と一気に書きあげ、タテ棒、ヨコ棒の強さから、その気骨、気迫が伝わってきます。

二本目のものは石天童麟です。万仞道坦の弟子で愛知県万福寺の後を継ぎ、愛媛県の法竜寺に住しました。奇しくも師資二代の「祖師西来意」です。共に私の所蔵するところですが。いかに「祖師西来意」が万仞門下で問話されたことがわかります。石天の書は時々、書画屋で見かけます。

永きにわたり、宗門祖師の書を拝見して、そのいわんとするところを見極めてきました。私達はこれらの書を見て、生きる力を頂き、これを後進に伝えていきたいと思っています。

完



石天の書(正泉寺蔵)

仏遺教経解説

10

丸山劫外

まるやま・こうがい
昭和21年群馬県生。早稲田
大学卒業。駒澤大学大学院博
士課程満期退学。昭和57年
得度（浅田大泉老師）。同年立
職（浅田泰徳老師）。平成元年
嗣法（余語翠巖老師）。現在所
沢市吉祥院住職。曹洞宗総合
研究センター特別研究員。

仏遺教経（仏垂般涅槃略説教誡経）

姚秦三蔵法師 鳩摩羅什 訳

原文訓読

汝等比丘、若し智慧有れば則ち貪著無し。常に自ら省察して失すること有らしめざれ。是れ則ち我が法の中に於いて能く解脱を得。若ししからざる者は既に道人に非ず、又白衣に非ず、名づくる所無し。

実智慧は則ち是れ老病死海を度る堅牢の船なり。亦是れ無明黒闇の大明燈なり。一切病者の良薬なり。煩惱の樹を伐るの利斧なり。是の故に汝等、まさに聞思修の慧を以て、而も自ら増益すべし。若し人智慧の照有れば、是肉眼なりと雖も、而も是明見の人なり。是れを智慧となづく。

訳

修行者たちよ、もし智慧があるならば、貪り執



大本山總持寺祖院

聞法と坐禅、これが曹洞宗の修行の要なのです。私事になりますが、若い頃は内山興正老師という方の元で、学ばせて頂き、さらに余語翠巖老師の教えを受けました。また、多くの老師様方の御提唱（禅宗では、師が『正法眼蔵』や語録について講義をした

智慧、智慧といいますが、それではどうしたら智慧を得られるのでしょうか。実は、お釈迦様は、いつもの確な指針を示してくださっているのです。

聞思修の智慧です。聞慧、思慧、修慧です。聞慧は、仏法をお聞きして得る智慧です。思慧はこれをよく思惟して得る智慧です。修慧は仏道を実践修行して得る智慧です。これらを三慧といえます。

万巻の仏教書を読もうとも、智慧を得ることは難しいでしょう。知識は得られるでしょうし、知恵も得られるでしょう。しかし、智慧は、仏道修行をなさった老師様たちの教えを受けることが、仏道修行としてとても大事なことなのです。それは修行の第一歩といっても過言ではありません。法を説いてくださる人につかないで、仏教書などを勝手に解釈することは、お釈迦様の教えに反します。そのように自分の考えだけでは、本当の智慧がつかないことを、お釈迦様はご存じだったのです。

着することがないのである。いつでも自分自身をよく観察して、智慧を失わないようにしなければならぬ。そうであるなら、私の教えによって必ず悟りを得られるのである。智慧のない者は、出家者とはいえないし、また在家の人ともいえないし、名付けようがないのである。

まことの智慧は、老・病・死の海をわたる頑丈な船のようなものである。また真理がわからずに煩惱にとらわれている暗闇を照らす大いなる灯明である。あらゆる病人を癒す良薬である。また煩惱を断ち切るすぐれた斧のようなものである。

（智慧はそのようなはたらきがあるのだから）修行者たちよ、聞思修の智慧を学んで、さらに深まっていくなのである。智慧に照らしてみるならば、（煩惱はまだある）肉眼であっても、真理を観ることができるといえるのである。これを智慧の教えというのである。

解説

真理を知ることが智慧という

お釈迦様は、智慧がいかに大切であるかということを説いています。たとえ出家したとしても、智慧がなければ、出家者とはいえないし、形だけは出家の姿をしているので在家の人とも

りすることを提唱といえます。）を聞かせて頂き、わからないなりに、仏法をしみこませて頂いたと確信しています。仏法とはなんぞや、といつも疑問だらけ、道元禅師様の著述である『正法眼蔵』は、いくら聞いてもちんぷんかんぷん、でしたが、この頃ようやく少し分かってきたといえる段階です。仏道の実践修行は、曹洞宗では坐禅修行をおいて他にありません。

前の号でも解説しましたが、知恵と智慧とは違いがあります。知識や頭脳を使って得るのは知恵ですが、聞思修の三慧によって得られるのは智慧です。この智慧によって、解脱が得られると、お釈迦様は断言なさっています。解脱とは、悟りです。悟りは得られると、お釈迦様は確約なさっているのです。

真理とは

それでは真理とはどのようなことなのでしょう。うか。いまだ十分な智慧を得ていない私がお教

えするの勇氣の要ることですが、解説としてご理解ください。

お釈迦様がお説きくださった真理は、とても明白なことだと、私は理解しています。

「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂静」などの言葉は、真理を表しています。「諸行無常」は万物は変わりづめに変わっていて、永遠不滅な事も、物も一切無いということ。「諸法無我」は、全ての事も、物も、因があり縁があつて生じているのであつて、実体性が無いということです。が、実体性という表現には説明があるのでしよう。例えば花について考えてみましょう。きれいに咲いている花が目の前にあるとしましょう。この花がぼんと突然にこの世に表れるのではありませんね。種を蒔き、太陽の光や雨や諸々の条件によつて花開くわけです。種は因、雨等は縁です。実体性がないということをおのりに理解しておいてください。では種はどうなのかということになりませんが、やはり因と縁によつて種になつて居るのです。自分自身についても因と縁によつてこの世に生まれています。「縁起の教え」も真理の要素です。余談になりますが、母と父から一ゲノム(二十数対の染色体)ずつもらつていますから、前世と全く同じ人間ではありません。

「涅槃寂静」はお釈迦様のお説きくださった教えをきちんと学べば、生死を離れて安らかになれるということです。死ねば涅槃寂静になれる論のうれいをなくすべきである。これを不戯論の教えというのである。

解説

戯論の意味は、意味の無いことを論じることを行います。あまり意味の無いことを、口角泡を飛ばして論じるようなことを避けなくてはならない、とお釈迦様はおっしゃいます。ということは、お釈迦様の時代にも、ああだ、こうだと無駄なことを論じているお坊さんたちがいたということです。

どんなことが無駄なことでしょう。道元禅師様は『正法眼蔵』「八大人覺」巻のなかで次のように説いています。

「八には、不戯論。証して分別を離るるを、不戯論と名づく。実相を究尽す、乃ち不戯論なり」かえつて難しそうな文言ですが、駒澤大学の石井修道名誉教授の訳を手引きとして引用させて頂きます。「八つには無意味な議論をしない。《真理をさとつて分別を離れることを無意味な議論をしないと名づく



大本山永平寺

ということではありません。死ねば楽になれると思ひ込んで、自ら命を絶つことはやめましょう。そんなことはありません。

今生があるのですから来生はある、と道元禅師様のお師匠様の如浄禅師様は『宝慶記』のなかで明らかにお説きです。来生の果報のためにも今生をしっかりと生きることは大切なことです。

この度、タイの少年たちが洞窟に閉じ込められて話題になりましたが、さすがに仏教国の少年たちは、美しい合掌の姿を見せてくれました。私たちも、せっかく今生でお釈迦様の教えに触れたのですから、教えを自らにしみこませて、どんな苦勞にもめげず、くさらず、掌を合わせつつ乗り越えてまいりましょう。

原文訓読

汝等比丘、若し種々の戯論は、其の心則ち乱る。また出家すと雖も、なお未だ脱することを得ず。是の故に比丘、まさに急に乱心戯論を捨離すべし。若し汝、寂滅の樂を得んと欲せば、ただまさに善く戯論の患を滅すべし。是れを不戯論となづく。

訳

修行者たちよ、いろいろな戯論は、心を乱すものである。たとえ出家したとしても、まだ解脱しているわけではないのだから、修行者たちよ、すみやかに心を乱す戯論を捨て去るべきである。もしそなたが、煩惱のない寂滅の樂を得たいと望むならば、戯

ける。真実の姿を極め尽くせば、無意味な議論をしないこととなる。《

宇宙には果てがあるか、ないか、そのようなことを論じたり、あの世は存するか否か論じたり、等々証明しようのないことを、論じあうことはやめよ、と言われているのです。お釈迦様の時代と違い、現代では

証明できることもありますが、知識をひけらかして持論を展開することは、仏弟子としては厳に戒めなくてはなりません。でも、私は、個人的には「あの世はある」と思っています。ただどのよう有り様か等全く分かりません。

ただ証明する必要も無く、はつきりと分かっていることは、今、この世に生きているということですから、微力ながら、この世での命が終わるまで、力を尽くしてこの世で生ききりたいと思っています。日本は西日本豪雨にも最近は襲われてしまいました。突然この世の命を閉じなくてはならない時も、誰にでもあります。命のある間、あまり悔いのないように生きあつていきたいものです。

父母と妻の命日には必ず墓参します

藤木 先生の菩提寺の願成寺というお寺さんは曹洞宗とうかがっておりますが。

大村 そうです、山梨県韮崎市にある曹洞宗のお寺で、そこがうちの菩提寺として、いつもお参りに行っております。武田信義公のお墓があるところです。信義公は武田の始祖、信玄の十

何代か前の、山梨に入って最初に武田を名乗った人物ですね。願成寺は先般、本堂を建て替えたりして立派になりました。

藤木 先生はお墓参りに行かれる日は決めておられますか。

大村 これは、確実に行くのは年に三回です。家内の命日の九月一日、母親の命日の十二月三日、それに父親の命日の二月十七日、これだけは欠かさず行くことにしています。どうしても

生かされている
という気持ちに
なるとき



大村家の菩提寺 鳳凰山願成寺(韮崎市・曹洞宗)



大村 智(おおむらさとし)
1935年山梨県韮崎市出身。58年山梨大学学芸学部自然科学科卒業。58年東京都立隅田工業高等学校教諭。63年東京理科大学大学院理学研究科修士課程修了。65年(社)北里研究所入所。75年北里大学薬学部教授。90年北里研究所理事・所長。2007年同大名誉教授。08年(学)北里研究所名誉理事長。13年から同大特別荣誉教授。2001年学士院会員。12年文化功労者。15年文化勲章、ノーベル生理学・医学賞。

行けないときは、私が兄弟に指名して、行ってくれと言って、やっていますけれどもね。あと、お彼岸に行くこともあります。

願成寺さんは先代が身延山のほうのお寺に行つて、その跡を息子さんが継がれました。若いけれども非常に熱心にやっていますね。坐禅会などをやって、村の人たちを集めては熱心に行つてくれています。本来なら私もそういうところに行つて、坐禅まで組んでみたいと思つてはいますが、いかんせん今はめちゃくちゃ忙しくて、ちよつとそういうことはかないませんけれどもね。

それからもう一つ、願成寺さんに重要文化財

があります。阿弥陀如来と脇侍で、これも変な話だけでも、戦前、お寺さんは困窮して、廃仏毀釈のあおりを受けてお寺を維持することもできないような状態になったものだから、これを売りに出した。そのときに青年団の団長をやっていた、うちの親父が反対して、青年団を挙げて反対することになって結局お寺に残ったわけです。そうしたら戦後間もなく、これが重要文化財に指定されたんですね。私はそういう話も聞きながら育っているので、やっぱり前に言ったような、敬神崇祖という言葉が私の体には何かの形で染み付いているわけです。

藤木 先生は仏教というものに対しては、どん

なお考えをお持ちでしょうか。

大村 仏教というのは大らかでいいと思います。ただ昔は多少宗教上の争いはあったと、よく聞きますね。昔の本を読むと、何と言ったらいいか、多少先鋭的な宗教と言ったらいいかな。とにかくあまり寛容的ではないという時代があったと思うけど、今はだいぶ収まってきている。今そういうことは、日本ではないでしょう。みんな互いに受け入れながら、お互い仲良くやっているじゃないですか。ああいうのは日本の仏教しかないと思いますよ。

仏教には包容力がある。そういう意味では、僕は仏教というのがちゃんと栄えるということは大それたと思いますね。お寺の数では、曹洞宗が一番多いわけでしょう、日本では。だから、一番頑張ってもらわなきゃいけないと思いますよ。

藤木 激励していただいたような気持ちになります、ありがとうございます。

大村 私は曹洞宗だからということではなく、どこでも、いいお寺があると、お参りに行っています。

丹精にある」という言葉もいただいたりしました。それからお坊さんのお付合いということにつながるのか、僕も短いお経ぐらいいは覚えていますが、最近忘れかけてきているけれども、幾つかの短いお経は。

藤木 どういうお経でしょうか。

大村 般若心経、延命十句観音経、それに舍利礼文。これくらいは暗唱で

きます。修証義は覚えきれない。だからこれは経本を読みながら唱えますね。般若心経は毎朝、お経をあげて、お線香を立ててね。だけれども、あれも似たようなところがあるから、だぶつたりしますね。なかなか終点に届かないときがあります。同じようなところへいつちやつて、くるると、なかなか終わるまでいかないとか。

藤木 先生でもそういうことがありますか。

大村 僕なんかまさにそれです。よく意味がわかっていないからだと思います。大体こういうことを言っているということは、もちろんテキストブックを読んでいるから大体分かります。けれども、そのつながりが、ここでこういう言葉が出てくるということがはつきり理解できて

仏壇の前に坐ってお経をあげると

藤木 前に松原泰道先生についてお話になったところで、先生は女子美術大学の理事長もなさっておられたと……。

大村 そうです。北里研究所の所長をやっているときに、私は絵の関係も結構いろいろやっているものですから、女子美の百周年記念事業があるから少し力を貸してくれないかと頼まれたわけです。兼務でいいからというので引き受けて、十四年やっていましたよ、理事長を。

藤木 そうですか。絵がお好きということですね。藤崎に美術館もお作りになったわけですね。

大村 松原先生は、特にどこが悪いというのではなくて、よくお嬢さんうちの東洋医学総合研究所の病院にいられてました。そうするとお嬢さんのほうは、先生を病院の待合室で待つて頂いて、私のところへ来ては先生の本とか色紙を持ってきてくれたんですよ。今でも大事に、きちんと箱にしまっている本の中に、「よき人生は日々の



故郷の藤崎市神山町に建つ藤崎大村美術館

願成寺蔵 阿弥陀三尊像(国指定重要文化財)右は山本御住職

いるわけじゃないですから、堂々巡りするというのもありますよ。この間、円覚寺の横田南嶺さんから頼まれて講演に行きました。僕が延命十句観音経を覚えていたと言ったら、びっくりしたようですよ。科学者がそんなことをやるのかと思つたんじゃないでしょうか。

藤木 それは普通の人でも驚くと思いますね。最後に

後になります。先生にとつて、宗教というのは何でしょうか。

大村 全く自然に、いろんなときに神頼みじゃないけれども、いろいろと、こうあつてほしいなということがありますね。それがまた宗教のいいところだと思つてます。例えば仏壇の前に坐ると、何となく助けられているという思いが出てくるでしょう。それが大事であつて、えらい理屈で仏教の教えはどうのこうのと、そんな理屈を言っているわけじゃない。自分は生かされていますよ、仏壇の前に坐ると。それが大事だと思つてます。

完

寛容さを失う社会のゆくえ	増山 均	2
佐々木宏幹インタビュー・第1回	佐々木宏幹	4
毎日書道	高橋秀榮	11
作法で導く心の調え方	藤井隆英	12
宗門人の書	吉岡博道	14
仏遺教経解説10	丸山劫外	16
大村智インタビュー・第2回	大村 智	20

表紙画／平川恒太

『修証義』解説 丸山劫外

道元禅師に学ぶ人間の道



定価1,400円(税別)

発行所 仏教企画
発売元 佼成出版社

総序 仏法に出会えた幸せ
懺悔滅罪 広々とした仏の御前に
受戒入位 仏の灯りに照らされて
発願利生 ともに手をたずさえて
行持報恩 あなたもやがて仏に

お申込

書店もしくは、下記宛に
ハガキ・電話・FAX・メールにて

仏教企画

〒252-0113 相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
電話：042-703-8641 FAX：042-783-0989
Eメール：fujiki@water.ocn.ne.jp